

小
說
尾
部
集

張
恨
水

完



李田露作著

底是集

墨山堂出版

明治二十五年九月廿八日印刷

明治二十五年十月三日出版

著作者 幸田露伴

發行者 青木恒三郎

印刷者 加藤龜太郎

製本所 青木嵩山堂

發賣所 青木嵩山堂

全 勢州四日市港堅町
嵩山堂分店

東京市京橋區南傳馬町二丁目十四番地寄留

大阪市西區京町堀上通三丁目百四十八番屋敷

大阪市中心齋橋筋安堂寺町

東京市京橋區南傳馬町二丁目

勢州四日市港堅町

露伴子著

小説
尾花集

目録

五重塔

三十五回

明治二十四年冬の作

血紅星

八回

おなじ年初夏の作

小尾花集

蝸牛露伴著

尾

五重塔

其一

花集

木理美しき機胴、縁よへわざと赤檜を用ひたる岩疊作りの長火鉢よ
對ひて話し敵もなく唯一人、少しの淋しさうに坐り居る三十前後の
女、男のやうに立派な眉を何日掃ひしか剃つたる痕の青々と、見る
眼も覺ひべき雨後の山の色を留めて翠の匂ひ一トしは床しく、鼻筋
つんと通り眼尻キリ、と上り、洗ひ髪をぐるぐると酷く丸めて引裂
紙をあしらひに一本簪でぐいと留めを刺した色氣無の様なつくれど、
憎いほど烏黒よて艶ある髪の一ト綜二綜後れ亂れて、淺黒いな

尾 花 集

がら澁氣の抜けたる顔にか、れる趣きひ、年増嫌ひでも褒めずにも
 置かれまじき風体、我がものならば着せてやりたい好みのあるよと
 好色漢が随分頼まれもせぬ詮議を蔭で爲べきよ、さりとの外見を
 捨て、堅義を自慢にした身の装り方、柄の選擇こそ野暮ならね、高
 が二子の綿入れに縹子襟かけたを着て、何所も紅くさいところもな
 く、引つ掛けたねねばかりの往時何なりしやら疎い縞の絲織な
 れど、此とて幾度か水を潜つて來た奴あるべし。今しも臺所よて
 の下婢が器物洗ふ音ばかりして家内靜かよ、他に人ある様子もな
 く、何心なくいたづらに黒文字を舌端で廻り躍らせなどして居し女、
 ぶつりと其を噛み切つてふいと吹き飛ばし、火鉢の灰かきならし炭
 火体よく埋け、芋籠より小巾とり出し、銀ほど光れる長五徳を磨き
 かとしを拭き、銅壺の蓋まで奇麗よして、さて南部霰地の大鐵瓶を

五重塔

正然ちやんとかけし後のち、石尊せきそん様詣りのついでに箱根へ寄つて來しものが姉御
 へ御土産と呉れたらしき寄木細工の小織麗なる煙草箱を右の手みぎに持
 た鼈甲管の煙管で引き寄せ、長閑のびやかに一服吹ふて線香の煙るやうゆるに緩
 くけふと煙りを噴き出し、思おもはず知らず太息吐いて。多分たぶんの良人の手
 に入いるであらうが、憎にくいのつそりめが對ふへ廻り、去年使ふてやつ
 た恩も忘れ、上人様しやうにんさまは胡麻摺り込んで、強て此度の仕事を爲うと身
 の分ぶんも知らず願ねがひを上げたとやら、清吉せいきちの話しで、上人様しやうにんさまは依
 怙こひ最さい肩の御情おこころにあつても名さへ響かぬのつそりだいじは大切な仕事を任せ
 らる、事ことは、檀家方だんかたの手前寄進者方てまへきしんしやがたの手前てまへも難しからうなれば大丈
 夫ぶ此方に命いのちけらるゝ極きまつたこと、よしまたのつそりいのちに命けらるれ
 ばとて彼奴あれぬに出來る仕事しごとでもなく、彼奴あれぬの下したは立つて働く者ものもある
 まいなれば見事出來し損ずるみごとの暇ひまは見みえたととのよしなれど、早はやく

尾 花 集

頁人（うらひひと）が愈々（いよいよ）御用命（ごようめい）かつたと笑（わら）ひ顔（がほ）して歸（かへ）つて來（こ）られ、バよい、類（るい）の
 少（ち）い仕事（しごと）だけに、是非（ぜひ）爲（し）て見（み）たい受（う）け合（あ）つて見（み）たい慾德（よくとく）の何（なん）でも關（かま）
 へぬ、谷中（やちゆう）感應寺（こんおんじ）の五重塔（ごぢゆうたか）へ川越（かわごへ）の源太（げんた）が作り居（を）つた、嗚呼（ああ）よく出（で）
 來（き）した感心（かんしん）なと云（い）へれて見（み）たいと面白（おもしろ）がつて、何日（いつ）になく職業（しやうぎふ）も氣（き）
 のはづみを打（う）つて居（ゐ）らるゝに、若（も）し此（この）仕事（しごと）を他（ひと）に奪（と）られたら何（なん）のや
 うな腹（はら）を立てらるゝか肝癪（かんしやく）を起（おこ）さるゝか知（し）れず、それも道理（だうり）であつ
 て見（み）れば傍（わき）から妾（めかけ）の慰めやうも無（な）い譯（わけ）、嗚呼（ああ）何（なん）にせよ目出度（めでた）う早（はや）く
 歸（かへ）つて來（こ）られ、バよいと、口（くち）の出（だ）さねど女房（にようばう）氣質（かたぎ）、今朝（けさ）背而（さうろ）から
 我（わ）が縫（ぬ）ひし羽織（はおり）打ち掛（か）け着（き）せて出（だ）したる男（をとこ）の上（うへ）を氣遣（きづか）ふところへ表（おもて）
 の骨太（ほねぶと）格子（くわう）手（て）あらく開（あ）けて。姉御（あねご）、兄貴（あにき）の、なま感應寺（こんおんじ）へ、仕方（しかた）
 が無い、それで姉御（あねご）、濟（た）みませんが御頼（おたの）み申（まを）します、つい昨晚（しふべ）
 醉（ひ）ましてと後（あと）の云（い）のす異（い）な手（て）つきをして話（はな）せば、眉頭（まゆびら）に皺（しは）をよせて

五 重 塔

笑ひながら。仕方のないも無いもの、少し締まるがよいと、云ひ
く立つて幾干かの金を渡せば其をもつて門口より出で、何やら諄々
押問答せし末此方に来りて、拳骨で額を抑へ。何も濟みませんで
した、ありがたうござりますると無骨な禮を爲たるも可笑

其二

火の別にとらぬから此方へ寄るがよいと云ひながら、重げに鐵瓶を
取り下して、屬輩にも如才なく愛嬌を汲んで與る櫻湯一杯。心に
花のある待遇の口は言葉の仇繁きより懷かしきよ、悪い請求をさへ
すらりと聽て呉れし上、胸は蟠屈りなく淡然と平日のごとく仕做さ
れて、清吉却つて心羞かしく、何やら魂魄の底の方がむづ痒いや
うに覺えられ、茶碗取る手もおづ／＼として進みかぬるばかり、濟
みませぬといふ辭誼を二度ほど繰返せし後漸く乾き切つたる舌を濕

尾 花 集

す間もあらせず。今頃の歸りとの餘り可愛がられ過ぎたの、ホ、

遊ぶのよけれど職業の間に缺いて母親は心配するやうで男振が

悪いでないか清吉、汝、此頃仲町の甲州屋様の御本宅の仕事が済

むと直に根岸の御別荘の御茶席の方へ廻らせられて居るでないか、

良人のも遊ぶの随分好で汝達の先に立つて騒ぐの毎々なれど職業を

粗略にするの大の嫌ひ、今若し汝の顔でも見たら又例の青筋を立

つるゝ定つて居るを知らぬでもあるまい、さあ少し遅くなつた

れど母親の持病が起つたとか何とか方便の幾干でもつくべし、早う

根岸へ行くがよい、五三様も了つた人なれば一日をふて、怠惰ぬゝ

免じて、見透かしても旦那の前庇護ふて呉るゝであらう、お、朝

飯がまだらしい、三や何でもよいほどは御膳を其方へこしらへよ、

湯豆腐は蛤鍋と行かぬが新漬は煮豆でも構ひぬのう、二三杯か

五 重 塔

つこんで直と仕事は走りやれ走りやれ、ホ、睡くても昨夜をおもへ
 不堪忍の成らうに精を惜むな辛防せよ、よい辨當も松も持たせて
 遣るひと、苦くはなけれど効驗ある藥の行きとどいた意見、汗を
 出して身の不始末を慚づる正直者の清吉。姉御、でい御厄介あ
 つて、直は仕事に突走りますと、驚掴みよした手拭で額拭きく勝
 手の方立つたかとおもへば、既ざらくざらつと口の中へ打込む
 如く茶漬飯五六杯、早くも食ふて了つて出て來り。左様なら行つ
 てまわりますと、肩ぐるみに頭をついと一ツ下げて煙草管を収め、
 壺屋の煙草入三尺帶はさすがの氣早き江戸ツ子氣質、草履つ、かけ
 門口出づる、途端に今まで黙つて居たりし女の急は呼びとめて。
 此二三日のつとり奴に逢ふたかと石から飛んで火の出し如く聲を
 送らし問ひかくれば、清吉ふりむいて、逢ひました逢ひました、

尾 花 集

八

しかも昨日御殿坂で例ののつそりがひとしほのつそりと、往生した
 鶏のやうにぐたりと首を垂れながら歩行いて居るを見かけましたが、
 今度此方の棟梁の對岸は立つて、のつそりの癖は及びも無い望みを
 かけ、大丈夫でゐるもの、幾干か棟梁も姉御も心配をさせる
 其面が憎くつて面が憎くつて堪りませねば、やいのつそりめと頭か
 ら毒を浴びせて呉れました、彼奴の事故氣がつかず、やいのつそり
 め、のつそりめと三度めは傍へ行つて大聲で怒鳴つて遣りました
 れは漸く吃驚して梟は似た眼で私の顔を見詰め、あ、清吉あーよー
 いかと寢惚聲の挨拶、やい、汝は大分好い男兒になつたの、紺屋の
 干場へ夢にでも上つたか大層高いものを立てたがつて感應寺の和尚
 様は胡麻を摺り込むといふ話したが、其は正氣の沙汰か寢惚けてか
 と、冷語を藁向から與つたところ、ハ、ハ、姉御、愚鈍い奴といふも

五 重 塔

のへ正直しやうじきでゝありませんか、何なんと返事へんじをするかとかもへば、我わも随ずい
 分骨ぶんほねを折をつて胡麻ごまの摺そつて居ゐるが源太親方げんたおやかたを對岸むかいがはに立たて、居ゐるので
 何なんも胡麻ごまが摺そりづらくて困こまる、親方おやかたがのつそり汝きこまやつ爲なて見みろよと譲ゆづつ
 て呉くれ、バ好いいけれどものゝとの馬鹿ばかに蟲むしの好よい答こたへ、ハ、ハ、憶おもひ
 出だしても心配相しんぱいさうに大真面目おほまじめくさく云いつた其面そのつらが可笑をかしくて堪たまりませぬ、
 餘ちまり可笑をかしいので憎氣にくつけも無なくなり、篋ばらばら棒ぼうめと云いひ捨をては別わかれましたが。
 其限それぎりか。然はい。左様さやうかへ、さあ遅おそくなる、關かまはずは行くがよい。
 左様さやうならと清吉せいきちの自己おのが仕事しごとふかもむきける後あとのひとりで物思ものおもひ、
 戸外おもてでゝ無心むしんの兒童達こどもたちが獨樂戰こまあての遊びあそびに聲々喧こゑぐわいしく、一人殺にんころしぢや
 二人殺にんころしぢや、醜態さうたを見みよ讐ひたきをとつたぞと號わめきちらす。おもへば
 これも順々じゆんじゆん競争けいさうの世よの狀さまなり

尾 花 集

十

世に榮に富める人々の初霜月の更衣も何の苦慮なく、紬は絲織は自
己が好きぐの衣着て寒さに向ふ貧者の心配も知らず、やれ爐開き
ぢや、やれ口切ぢや、それゝ間ゝ合ふやう是非とも取り急いで茶室
成就と待合の庇廂繕へよ、夜半のむら時雨も一服やりながらで無う
ての面白く窓撲つ音を聞き難しとの贅澤いふて、木枯凄じく鐘の音
氷るやうなつて来る辛き冬をば、愉快いものかなんぞゝ心得らるれ
ど、其茶室の床板削りに鉋礪ぐ手の冷ねわたり、其庇廂の大和がき
結ひは吹きちらされて疝癩も起すことある職人風情の、何ほどの悪
い業を前の世ゝ爲し置きて同じ時候に他との違ひ悩め困ませらるゝ
もののぞや、取り分け職人仲間の中でも世才ゝ疎く心好き吾夫、腕の
源太親方さへ去年いろゝ世話して下されし節に立派なものぢやと
賞められし程確實なれど、寛濶の氣質故ゝ仕事も取り脱り勝で、好

五重塔

い事の毎々他ゝ奪られ、年中嬉しからぬ生活かたゝ日を送り月を迎
 ふる味氣無さ、膝頭の抜けたを辛くも埋め綴つた股引ばかり我が夫
 に穿かせ置くこと婦女の身として他人の見る眼も羞づかしけれど
 何よも彼も貧が爲する不如意に是非のなく、今縫ふ猪之が綿入れも
 洗ひ曝した松坂縞、丹誠一つで着させても着させ榮ゑなきばかりで
 なく見とも無いほど針目勝ち、それを先刻は頑是不い幼心といひか
 がら、母様其衣の誰かのぢや、小いからの我の衣服か、嬉いのうと
 悦んで其儘戸外へ駆け出し、珍らしい暖い天氣ゝ浮かれて小竿持ち、
 空ゝ飛び交ふ赤蜻蛉を撲いて取らうと何處の町まで行つたやら、鳴
 呼考へ込め裁縫も厭氣ゝなつて来る、せめて腕の半分も吾夫の氣
 心が働いて呉れたならば斯も貧乏の爲まいゝ、技倆はあつても寶の
 持ち腐れの俗諺の通り、何日其手腕の顯れて萬人の眼ゝ止まると云

尾 花 集

ふことの目的もないた、き大工穴鑿り大工、のつそりといふ忌々しい譚名さへ負せられて同業中にも輕しめらる、齒痒さ恨めしさ、蔭でやきもきと妾が思ふよの似ず平氣なが憎らしい程なりしが、今度のまた何した事か感應寺よ五重塔の建つといふ事聞くや否や急よむらくと其仕事を是非爲る氣よなつて、恩のある親方様が望まる、をも關のす惘然よ此様な身代の身に引き受けうとい、些ねら過ぎると連添ふ妾でさへ思ふものを他人の何んと噂さするであらう、ましてや親方様の定めし憎いのつそりめと怒つてござらう、お吉様の猶は更ら義理知らずの奴めと恨んでござらう、今日の大抵何方よか、任すと言上人様の御定めなざる筈とて今朝出て行かれしが未だ歸られず、何か今度の仕事だけの、彼程吾夫の望んで居らる、とも此方の分は應せず親方よの義理もあり旁た親方の方よ上人様の任さる

五 重 塔

れバよいと思ふやうな氣持もするし、また親方様の大氣にて別段怒
 りもなさらずバ吾夫は爲せて見事成就させたいやうな氣持もする、
 ゑ、氣の揉める、何なる事か、到底良人への御任せなさるまいが若
 もいよ／＼吾夫の爲る事になつたら何の様な親方様か吉様の腹
 立てらるゝか知れぬ、あゝ心配に頭腦の痛む、また此が知れたらば、
 女の要らぬ無益心配、其故何時も身体の弱いと有情くて無理な叱言
 を受くるであらう、もう止めましょ止めましょ、あゝ痛と薄痘痕の
 ある蒼い顔を壓めながら即効紙の貼つてある左右の顚顚を縫ひ物捨
 て、兩手で壓へる女の、齡の二十五六、眼鼻立ちも醜からねど美味
 きもの食ひぬゝ膩氣少く肌理荒れたる態あはれにて、襤褸衣服にそ
 そけ髪ます／＼悲しき風情なるが、つく／＼獨り歎ずる時しも臺所
 の劃りの破れ障子がらりと開けて。

母様これを見てくれと猪之が